



農場を支える事務職として経験を積み いつかは牛の飼育現場で働きたい

この人
インタビュー
🎤

株式会社カミチクファーム

伊佐農場 管理課

(2020年3月 東海大学農学部応用動物科学科卒業)

梅崎 世成 さん

**被災で負った心身の傷を乗り越え
前向きに畜産を学んだ4年間**

幼少期から大の動物好きだという梅崎世成さん。将来は動物に関わる仕事に就きたいと考え、農学部応用動物科学科に進学した。

ところが、入学からわずか2週間後の2016年4月16日未明、熊本地震が発生。梅崎さんは倒壊したアパート内で本棚の下敷きとなり、右脚の膝上から先を失った。

「病院の集中治療室で目覚め、自分の右脚がないと気づいたときは、自分の人生はこの先どうなってしまうのかと、絶望的な気分でした」

それでも梅崎さんは、家族や友人らに支えられ、



次第に前向きさを取り戻していった。

「失ったものを嘆くのではなく、できることをやろう」。そう決意した梅崎さんは、入院中から勉強を開始。大学から送られてきた講義のDVDで学びつつ、リハビリにも精を出した。そして夏休み明けの9月には大学に復学。慣れない義足に苦労しながらも、隣の実家から片道1時間半かけて熊本キャンパスに通った。

2年次に進級し、ようやく課外活動に目を向ける余裕が出てきた梅崎さんは、チャレンジセンターの学生プロジェクト「動植物園プロジェクト」にも参加。被災した熊本市動植物園の復旧ボランティアを通じて、動物園の現状や組織運営のノウハウを学んだ。

さらに、宮崎大学・南九州大学との3大学連携プロジェクトのメンバーにも選出された梅崎さん。「適正家畜生産規範学実習」などの実習を通じて、1次（農業）、2次（加工）、3次（販売）それぞれの産業を融合した「6次産業」への理解と興味を深めていった。「幸運なことに、このプロジェクトを通じて国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）の研究者と知り合い、卒業研究を指導していただけることになりました。そのため3年次の1年間は、農研機構のハイレベルな研究環境についていくための準備期間と位置づけ、ひたすら論文を読んでいただきました」

こうして研究のベースとなる知識を身につけた梅崎さんは、4年次の大半を茨城県つくば市の農研機構で過ごした。

「農研機構では、飼育環境の変化と牛のストレスの関係を解明すべく、さまざまな実験を行いました。難しいテーマでしたが、興味深いデータも取得でき、実験の協力者として論文に名前を載せていただくこともできました」

6次産業化を実現する企業で

「現場がわかる事務員」として活躍

義足のハンデをもとめせず充実の4年間を過ごした梅崎さんは、2020年4月、牛のエサとなる飼料の生産から外食産業までを一貫して行う株式会社カミチクファームに入社した。同社は、大学時代に学んだ6次産業化を実践し、成功しているという全国的にも珍しい企業だが、入社を決め手となったのは社長が掲げる理念だったという。

「3年次の3月にインターンシップに参加した際、社長が『畜産動物は単なる肉ではない。その命をいたかくことに感謝しつつ、大事に飼育する』と、牛飼いととしての哲学を語っているのをお聞きし、ここしかないと思いました」

入社後は、グループ内で最大規模の牧場である伊佐農場の管理課に所属し、繁殖専門の事務員として、

子牛の出生報告書類の作成などを担っている。

「農場の事務は、現場と直結した仕事。大学で畜産を学んだからこそ、自分の仕事が現場をどう支え、6次産業全体のどこに関係しているかがわかるので、やりがいを感じられます」と梅崎さんは言う。

目標は、牧場事務に関連する知識やノウハウをしっかりと吸収し、業務のさらなる効率化を図ること。そして将来的には「現場に出て牛と触れ合う仕事がしたい」と夢を語る。

「義足では難しい作業もあるでしょうが、カミチクファームは社員の『やりたい』という意欲を尊重してくれる会社なので、チャンスはあると思います」

震災で右足を失うという試練を乗り越え、夢に向かって着実に進んでいる梅崎さん。最後に、後輩に向けてこんなメッセージを送ってくれた。

「大学は、さまざまな経験ができる場所ですが、4年間はあつという間です。気になることができたら即行動という心構えでいろんなことにチャレンジし、悔いのない大学生活を送ってください」



Profile

うめざき せな

福岡県大牟田市出身。2016年4月東海大学農学部応用動物科学科入学。熊本県南阿蘇村での暮らしを始めた矢先に熊本地震が発生し、右足を切断するだけを負うも、義足で学生生活を継続し、充実の4年間を送った。2020年4月株式会社カミチクファーム入社。現在は牛の繁殖農場の事務職として現場をサポートしている。